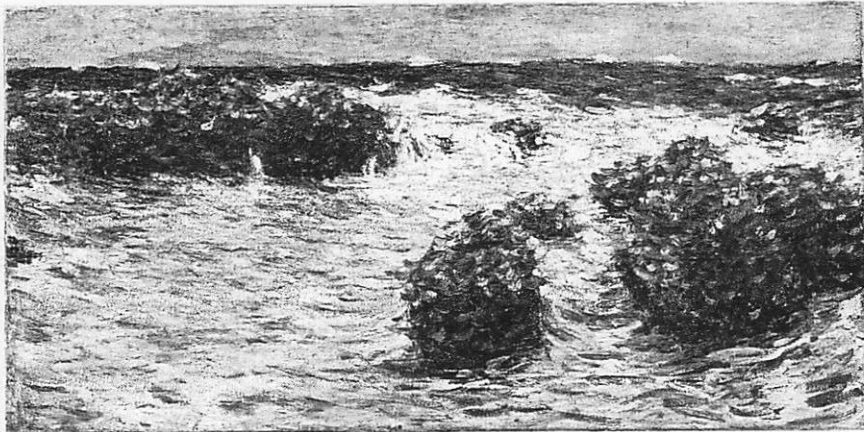


青木繁の「海景（布良の海）」＝石橋財団ブリヂストン美術館蔵



青木繁の「海」＝石橋財団石橋美術館蔵

青木繁2作 一つの下絵二分？

「海」「海景」つながる構図

画家青木繁は館山市布良⁵で代表作「海の幸」を描いた1904（明治37）年、海を題材に別の油彩2点を描いているが、実は一つの下絵を左右に二分して仕上げた可能性が出てきた。同市で27日にあった、青木繁「海の幸」フォーラムで新たな見方として紹介された。

館山のフォーラム、島田さん新説

「海の幸」制作現場の小谷家住宅の保存・公開をめざす「保存する会」運営委員の島田吉廣さん（64）が紹介した。作品は「海」（36・5センチ×73センチ）と「海景（布良の海）」（36センチ×73センチ）。石橋財団の石橋美術館（福岡県久留米市）、ブリヂストン美術館（東京都中央区）の所蔵だ。どちらもキャンバスに描かれている。

製版技術者の島田さんは、原寸大のレプリカを作ることで、今年2月、「海」のポジフィルムと「海景」の電子データを、両美術館に提供してもらった。両作品を並べると、海の色づかいや波の表現法は異なるが、「海」を右に「海景」を左に並べたら、ぴたりと重なる。モノクロ画像



新説を紹介する島田吉廣さん＝県南総合文化ホール

「青木は横長のキャンバスに下絵を描き、真ん中から切り離した。左の『海景』は布良滞在中に仕上げ、右の『海』は帰京後に完成させたのではないか。『海景』には絵の具のひび割れた跡が残り、作品を巻いた様子がうかがえるという。石橋美術館の森山秀子学芸課長は「作風は違っても、岩もパノラマの光景もつながる。一つの下絵から生まれた可能性はあります」と語る。

二つの複製画は、8月5日～24日に館山市コミュニティセンターで開催される「青木繁『海の幸』オマージュ展」で展示される。

（田中洋一）